

佐佐木信綱・木下利玄師弟作品に見る近代日本と庶民生活 —石川啄木との比較から—

The Modern Japan and Life of People by the Works
of Nobutsuna Sasaki and Rigen Kinoshita
—Compare Sasaki and Kinoshita with Takuboku Ishikawa—

水 野 信 太 郎
Shintaro MIZUNO

1. はじめに

本稿は明治19年（1886）に岩手県で生まれ、同45年（1912）に東京で没した近代歌人・石川一（いしかわ・はじめ）・筆名：石川啄木（たくぼく）について、主として歴史的な視点からアプローチしている一連の研究の続報である。筆者は既発表の拙稿を通して、啄木作品の中に詠われた「日本近代の庶民生活」や「近代的な科学技術」あるいは「都市と村落の景観」などに関する論考を試みてきた。

上記研究の中で、筆者は石川啄木だけでなく、彼と同時代の文学者たちの作品にも視野を広げる試みもしてきた。その一例が「北原白秋の作品に見る近代産業と日常生活 — 石川啄木との比較を中心にして—」¹⁾である。

同論考中において、「表-1 石川啄木同世代の文学者・文化人」を掲載した。同表は、石川啄木という文学者が日本近代にあって占めていた歴史的な立ち位置を見きわめたいとした一試行である。同表には啄木以外に46名を掲げている。とりわけ著名な人物としては飯田蛇笏、北原白秋、木下杢太郎、木下利玄、谷崎潤一郎、土岐善麿、中勘助、中村武羅夫、中里介山、野上弥生子、萩原朔太郎、平塚らいてう、武者小路実篤、吉井勇、若山牧水をあげることができる。先の46名中、男女の内訳は男性40名、女性が6名である。ちなみに全女性6名は北見志保子（きたみ・しほこ、1885-1955、小泉千樫と北原白秋門下の歌人であり、徳田秋声門下の小説家）、杉浦翠子（すぎうら・すいこ、1885-1960、齋藤茂吉門下の歌人であり、画家・杉浦非水の妻）、四賀光子（しが・みつこ、1885-1976、歌人であり、歌人・太田水穂の妻）、野上弥生子（のがみ・やえこ、本名ヤエ、1885-1985、夏目漱石門下の小説家であり、野上豊一郎の妻）、平塚らいてう（ひらつか・らいちょう、1886-1971、青鞥で知られる女性運動家）、三ヶ島霞子（みかじま・よしこ、1886-1927、与謝野晶子門下の歌人）である。

2. 木下利玄の生涯

本稿では石川啄木と同世代の文学者である木下利玄（きのした・りげん、1886～1925）とその師である佐佐木信綱（ささき・のぶつな、1872～1963）の作品を主な資料として近代の科学技術と庶民の日常生活、日々変貌しつつあった都市景観ほかを検証する。このような試みによって、日本の近代化と日々の生活に対する啄木や同時代歌人たちの作品を見つめなおすことが本研究の目指すところである。

最初に木下利玄の生涯を概観しておきたい。彼は石川啄木と同年の明治19年（1886）に岡山県賀陽郡足守町に生まれる。足守（あしもり）は現在、岡山県岡山市内の北区に含まれる地域である。誕生日は明治19年1月1日であった。利玄の本名は同じ文字によって表記するが、元来は「きのした・としはる」と呼ばれた。しかし利玄自身も周囲も「りげん」と音読みをし、特に歌人としての号は「きのした・りげん」で通したという。

足守の地は近世期には足守藩2万5千石として存在した。そして足守藩の藩主が木下家であった。木下一族は豊臣秀吉の正妻・北の政所の実兄の家である。北の政所（寧々：ねね・おね）の実家は、尾張で織田信長に仕えていた時代には杉原姓を名乗っていた。しかし豊臣秀吉が天下人となってから木下にかわる。つまり木下家の「木下」は、木下藤吉郎秀吉の姓から与えられたものである。豊臣家が滅びた後も、木下家は江戸時代を通じて足守の地から転封されることなく明治維新を迎える。

利玄の父の兄・木下利恭が第13代目の足守藩主で、明治維新を迎えたのちは子爵であった。しかし伯父である利恭が明治23年に他界する。利恭には跡継ぎがなかったので、利玄が14代目には選ばれる。このため利玄は両親と分かれて上京することとなる。わずか満4歳であった。利玄は父・木下利永の次男であったが、異母兄である利定は8歳で既に夭折していた。利玄の母・瀬原やすは、父の側室であった。このように木下利玄の生い立ちは、幼児期に家族を奪われるという耐えがたいものであった。

明治25年、学習院初等科に入学し武者小路實篤（むしゃこうじ・さねあつ）と同級になる。この時から「一番古い友達」と表現される交友が始まる。この年に岡山で実母が死去する。利玄は4歳の時に実母と離れて以降、ついに一度も再開することがなかった。

同31年に学習院中等科へ進む。学校教育とは別に佐佐木信綱の門下に入門して、短歌を学び始めた。35年には学習院中等科で志賀直哉（しが・なおや）とも同級となる。翌年には学習院高等科に進学。しかし39年、実父が病気となり同年2月、利玄が岡山へ帰省して看病に当たるが、父親も病没してしまう。この年の9月に東京帝国大学文科大学国文科へ入学した。

明治40年の4月14日に「十四日会」という文学グループを志賀直哉、武者小路實篤、正親町公和（おおぎまち・きんかず）と始める。これが東大在学中の41年に回覧雑誌『望野』を出す活動の基礎であった。のちに『望野』は『白樺』として創刊される。白樺派は志賀直哉、武者小路實篤、正親町公和のほかには有島武郎（ありしま・たけお）、有島生馬（ありしま・いくま）、

里見弴（さとみ・とん）兄弟を含む学習院関係者たちのグループである。ただし白樺派で短歌を創作していた歌人は木下利玄だけであった。

明治44年7月、東京帝国大学文科大学国文科を卒業。木下利玄は旧制中学校の教師を勤めることもあったが、経済的に不自由するという人生ではなく、むしろ生涯の多くを旅先で過ごしたという感が強い。

本研究の比較対象である石川啄木も晩年まで漂泊の生活を送った。しかし、わたしたちが抱く啄木像は、木下利玄の場合とは大きく異なる。金銭面で常に困窮する文学者の姿である。そのような視点から木下利玄という歌人は、石川啄木と好対照な存在として位置づけることができる。利玄はあたたかな家庭を失ったものの、学習院から帝国大学へと進学し、終生を通して金銭的な不安に襲われることのない生活を過ごした。ただ不幸な点は、下記のような親としての悲しみの中にあった。

私生活において利玄は明治44年に結婚。しかし翌年に生まれた長男・利公（としきみ）が生後5日で他界する。つづいて大正3年生まれの子男・二郎（じろう）も翌年に幼くしてなくなる。さらに同6年に誕生した長女・夏子（なつこ）さえも、その年末に夭折してしまう。結局、木下家の15代目は利玄が36歳のとき大正11年に生まれた三男・利福（としとみ）が継ぐこととなる。石川啄木が長男の夭折に見舞われたことを思い起こさせるが、利玄の場合には啄木以上に、わが子の死に繰り返し立ち会わされた。

上記のような背景が、利玄作品に弱者や貧しき者たちへのまなざしが盛り込まれる素地となる。利玄自身は大正14年（1925）に没する。満39歳であった。したがって木下利玄の作品に登場する生活環境や都市景観は明治時代末から大正時代いっぱいまで日本の各地域で見られたものである。一方、石川啄木の存命時期は明治末年までであった。両者の違いは明治期のみ啄木と、大正末までの利玄という時代的な区分も可能である。この点においても木下利玄を石川啄木の比較対象とすることに意義を見出すことができる。

さらに石川啄木と木下利玄は経済的な背景と没年の違いだけでなく、育った土地も異なる文学者たちであった。啄木は東北人であり、北海道をはじめとする北日本ならびに東日本でも東京・横浜までしか旅することがなかった。その点、利玄は西日本の温暖で穏やかな瀬戸内海沿岸の地に生まれた。利玄作品には海辺や舟運が詠われる事例が多く、その作風は生誕の地が反映されているものとみられる。後には東京で1人育つこととなるが、足守の旧領地を基盤とする家系の跡継ぎである自身の立場は生涯を通じて、木下利玄の意識から離れなかった。

3. 佐佐木信綱の生涯

つぎに木下利玄の師である佐佐木信綱（ささき・のぶつな、本名：佐々木信綱、1872～1963）について言及する。信綱は啄木と実際に面識をもっていた歌人である。森鷗外（もり・おうがい、1862～1922）の私邸で開かれた「観潮楼歌会」において共に短歌を披露しあった。

ただし佐佐木信綱と石川啄木には相違点も少なくない。年齢的には14歳ほど啄木が若い。学歴は佐佐木が最高学府を卒業しているのに対して、啄木はエリートコースとは言え中学校を中途退学している。しかも啄木が創作者としての自分を夢いていたのに対して、信綱には古典文学の研究者としての道もあった。

佐佐木信綱は当時の三重県鈴鹿郡石薬師（いしやくし）宿、現在の同県鈴鹿市内で明治5年に誕生している。東京帝国大学文科大学古典科を卒業。自身の作歌活動と同時に、万葉集の研究者としての生涯を過した。やがて第1回文化勲章の受章者となる。その後、昭和38年に静岡県熱海で死去、満年齢で91歳という高齢であった。

このように見てくると佐佐木信綱の場合は明治初年に鈴鹿で生まれ、明治・大正・昭和戦後までの長い年月を活動期とした上で、晩年は熱海という避寒地で没したことになる。明治時代いっぱいしか命を保てなかった北日本の石川啄木（明治45年没）とも、また佐佐木の弟子であり大正時代末までしか存命することができなかった木下利玄（大正14年没）の短命さとも事情を異にしていた。

4. 木下利玄作品に見る近代日本の生活

それでは本題である近代の新しい生活と科学技術が詠われている彼らの短歌作品に注目をしていきたい。最初は木下利玄作品に見られる衣食住の分野からである。まず衣類をみていく。

足袋ぬげば春の皮膚と我が素足もつれあふこそわりなかりけれ

腕にからむ紅き縮緬つめたさと重さおもへば君のいとしや

羽織着る君が素足の冷たさのかはゆさいたみ胸にまつはる

そして

ネルに着る裕羽織の甲斐絹裏つめたき光澤のさびし雨の日

この作品などからは、啄木作品の

君来るといふに夙く起き

白シャツの

袖のよごれを気にする日かな

が思い出されて、しかも状況の好対照さが感じられる。

繊維産業の生産現場での一場面であるが、

ブリツヂの赤き絲くづ人ふみてなほのこりゐる赤き絲くづ

などが利玄の作品にある。軽工業からスタートした近代日本の労働現場が眼に浮かぶ。

洋傘の一種である日傘も明治以降の婦人たちを飾る風俗であった。利玄は、このハイカラで高価な傘を手にする女性たちの外出姿を短歌にしている。

パラソルに秋の日光る眼の痛さや、疲れつゝ高原に行く

強き日にさすパラソルの日陰かげの柄を握れる指の白き縋帯

パラソルに通り雲より雨落ち來かんぼしり 甲走うらわりたる聲を立てつゝ

従来からの雨がさもある。本稿では今日よく見られる洋雨傘だけでなく、現代では珍しくなった江戸時代以来の雨傘についても注目したい。なお啄木作品にも赤い傘などが登場する。

二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花のみち

田舎町の料理屋の庭に桃が咲きならべてほせる番傘ひかる

履物についても近代という時代は新しい形状や素材が出現してくる。ただ興味深いことに利玄は履物に対して、それが発する音の方により大きな関心を有していたようである。靴音に関しては啄木も作品を残しているが、

砂みちに空氣草履うちわの内輪なる足跡のこるなつかしさかな

水兵はひさしぶりにてふむ地つちか歩ほ毎ごとにおこる靴音よろし

寝しづまる街の遠くの遠くより下駄くの音來つちいても土凍つちてたらむ

冴さゆる夜を刻々ふれる霜ならむ遠き下駄の音枕まくらにきこゆ

遠方この下駄の音來こずやみにけり深夜つちの地を霜とざすらむ

次は食事風景である。

食卓の牡丹の花に見入りつゝ四月二十日の晝とあひみる

そゞろなる浮氣娘えりの襟あしの生えぎはにくむ食卓の藤

旅先での食事も作品中に残されている。船中のようすも含めて、
遅くつきし湯元の宿のくらき灯にわれ等の食べし黒き羊羹

青き靄灯ともし頃の冷えへとすこやかなる身の食慾そゝる

晝たけて舟にひらける辦當の握飯眞白に日の光りあり

一方、自分の食事ではなく、他者それも庶民の昼食を見詰めることもあった。弱者への視線は啄木にも共通するものである。

他事なく働きつゞけ時たけて職工たちは午職ちかしも

また旅先の教育機関での光景であろうか。

学校の白壁に熱き冬日かも辦當前の授業聞けつゝ

食材へ向ける利玄の視線もある。啄木作品には「サラダ」が、いく作品が見られる。

瞳吸ふ青き野菜に目をまかせ夕べつめたき潮ぎはに立つ

あつき日を幾日も吸ひてつゆ甘く葡萄の熟す深き夏かな

木下利玄といえども旅を続けていると食事に事欠くようなこともあったらしい。つぎの作品などはそのような際のつらさ、哀れさを伝えている。旅程が延びたため宿舎への到着が遅くなってしまったのであろう。元来あまり、からだが丈夫でない利玄にとっては印象深い体験であったことと思われる。啄木の晩年は貧しかったため、空腹を紛らすことは少なくなかったろう。

馬返し蔦屋の縁に暮れてよりやすみし時のひもじき氣持

山の宿夕冷えきびし湯に入れば新けむたくひもじさおほゆ

ほかにも厨房を舞台にした作品が見受けられる。

梅雨時の執念き濕りしづみ居る厨の隅の生姜のにはひ

下記作品は、食と住まいと時計のある静かな暮らしである。

今しがた茶の間の時計十うちぬ厨にあまねき秋の光線

また時を刻む装置・仕掛けは、時計だけに限らなかった。

金魚草にトンボとまりて金の眼を日にまはす時ドンのとゞろく

住まい・建築物が現れる作品がある。啄木作品の中にも明り障子は詠まれている。

障子あくる音かろらかにすみたれば縁の日ざしに心よるかも

山の温泉の古旅籠屋の障子のみしろく目に入る朝のさみしさ

日光を二時間の後われ等去るおもひさびしみ御霊廟を出づ

のぼり来て旅籠につけばとみに寒し障子にあおきお山の夕陽

山の宿夕冷えさびし湯に入れば手足にしみてあたゝまりくる

夏の暑さは過しがたいものであったろう。

茶屋女うちは持つ手の汗ばみの晝のけだるさきりへすなく

舞ひ終へて扇を前に會釋する舞妓が肩の息なつかしむ

近代的な窓ガラスと、板ガラスを用いた鏡の登場も明治時代以降の大きな変化であった。実は啄木も近代の洋風な理髪店との縁が深く、故郷で床屋の鏡に親しんだだけでなく、東京本郷では「喜之床」という理髪店の2階で生活をした。

朝の雪谷間の石につもれるを温泉のガラス戸によりそひて見る

磯町の床屋によりて髭剃れば鏡にうつり霰ふるなり

さびしかった幼少時代、利玄にとっては日々の暮らしの舞台である建物さえもが寂しさの要因であった。これらの心情は師である佐佐木作品には見られず、より啄木の心持ちに近い。

學校に初めてわれの入りし時廊下になさしく自家をおもひき

眼さむれば隣の室のはなし聲そはわが上にかかはるらしも

建築工事中のようすを伝える作品もみられる。木下利玄は病床に横たわり、身体が丈夫な他者を感じている。晩年の啄木との共通点が見出せる。

普請場に材木を置く遠ひゞき病みて臥す日は悲しかりけり

建物からの明りが目にはいる光景もある。

赤坂の茶屋に三味なり灯がともし山王の櫻はつめたくしらみぬ

森の家灯をなつかしみ立ちよれば親子集ひて火をぞ炊きける

山上の温泉の湧く村の十月の夜の灯にせまる寒き山の氣

家ごとに引窓つけてあかりとる竹の山崎藪のうへの月

時雨降り早仕舞せる宵町のくゞり障子のともし灯の色

再び、旅先での光景であろうか。

額にせまりおほどかに暮る、山の容山下の人家に夜の灯とぼれり

大き山谷をくろみふもとべの地べたにひくき人家の灯かも

障子の灯ぼんやりあかし戸外にはいたく冴えたる月のすどさ

村の家の障子の灯影ぼんやりと道にあかるむ夜寒を行くも

話し更け他所よりかへる夜は寒し村の障子の所々のあかるみ

この村里ともし灯しめり家々のはなしふけたり星空の下

建築の室内のためばかりでなく、さまざまな楽しみのための照明も考案された。

顔と顔よせて行燈の繪を見るや櫻ににほううすあかり哉

明治屋のクリスマス飾り灯ともりてきらびやかなり粉雪降り出づ

これなどは東京の繁華街の景観であり、しかも経済的に充分めぐまれた立場からの作品だといえよう。それとは異なり、自分たちが旅を続けたり屋内でともし明りもある。

ちやうちんに昔 噺の情調をなつかしみつ、夜の旅をする

提灯が近づきてみれば小きざみに兒がいそぎをり村と村の間

灯をもてば廊下のてりの足下にひや、かなれやまだ宵のあさく

明りとともに、暖を採る設備も必要である。啄木作品の火鉢が思いおこされる。

くらき灯にわれ等居群れて冷えし手を火鉢によせし湯元の宿屋

日本の国土を結んでいた各種の交通手段は、明治時代から大きな変貌をとげる。身近な乗り物であった人力車は、近代日本の発明品である。

みちのくの石原道に日は暮れて揺るる俵に螢とびくる

たそがれのはかるさも消え肌さむみ心つつしみ俵にゆるる

黒い工場とたまり水の間にたそがれの白き道あり人力走りす、む

俵走り黄色の蜜柑^{あと}後になり温泉の町さかる胸^{むな}つぼらしさ

姉たちの乗り來し俵この宿の帳場の前に並べるさびしさ

人力車ではなく、おそらくリヤカー式に牽くようにして用いるか、あるいは手押し車のような形態の業務用移動手段も現れる。

汽笛吹き羅^{らう}亭^や屋^{まち}の車街とほる晝のころのなごむ土曜日

利玄は生涯を旅路に費やした感がある文学者であった。したがって当然のことながら船運での行程も少なくなかった。その作品数はきわめて多い。

舟^{あが}上る湖水の岸のいさゝかの畑の野菜をなつかしむかな

汽船^{ふね}に居て湊の町のおか葉見る陸にも海にも晝の日光る

錨^{いかり}下り汽船^{おふね}はばつたりおともなしすなはち舩^{はしけ}近よりきたる

この浦に今汽船^{ふね}二艘かゝりたり岸べに立ちて心ゆたけき

岩鼻をめぐれば外^{わたつみ}の海の大あをうねりに舟のりおりす

この日晴れ一天すめりわが舟を揺りてはすぐる蒼うねりかも

わが舟を揺りとほりゆくうねり浪^{きりざし}断崖の根に打ち揚ぐる見ゆ

紺^{こんじゃう}青の潮にのれる舟しづかに舫^{ふなべり}た、くうねりの音す

潮^{うしお}鳴れる洞窟の中をのぞきをれば入り行くうねりにわが舟のめる

生ひよれる真菰^{まこも}の中の川水を發動船ゆきうねらせにけり

旅人のための交通手段としての舟運だけでなく、食材を得るための船も扱われている。

網に入る鮭のうろこにうそ寒う夕日ひかりぬ船の秋風

また更に魚釣りは別の側面もありうる。

磯^{いそわ}曲ありすなはち寄れる蒼潮に揺れゐる舟は釣りせずらしも

さらに軍艦の存在も近代日本の実像であった。

この灣の波の最中に軍艦^{もなか}の入り來て場を占めさ揺らぎもせず

軍艦の鐵のふなべりまみを占め蒼ぐる波^{はしけ}に解ゆるらぐも

軍艦の腹のひたれる蒼波をわが解ゆるもうつ、に見たり

鉄道こそは近代を象徴する科学技術の総体である。鉄道の旅をした啄木にも通じる。

いましがた我が身のありし丘をよそに汽車は汽車とて走せずぎにけり

文挾^{ふばさみ}の停車場の前に一本^{ひとつもと}のあかるき黄色の秋の木立てり

鹿沼^{かぬま}にて姉にわかれし汽車の中のそゞろにさびし野^{もや}の靄を見る

日光は次第に遠み過ぎ去れる旅のかなしき野ずゑ汽車行く

埼玉の小停車場に汽車とまる橙いろのまばらなる灯よ

東京に近づく汽車に日は暮れて埼玉あたり野の灯さびしも

遠く行く夜汽車の窓の暗き灯のいくつも過ぎぬ踏切に立つ

踏切をよぎれば汽車の遠ひびきレールにきこゆ夏のさみしさ

そして利玄作品には、鉄道を主題としながら「花」を高らかに読んだ作品が目立つ。

桐の花雨ふる中を遠く來し常陸の國の停車場に咲く

汽車道の赤土土手の白き花夏が身近にまたよりに來ぬ

埼玉のとある小村の停車場の柵さくのダリヤひに秋の陽あつし

日光にちかき停車場杉の木の暗きが前にコスモス光る

菊に似し白き小花をばなをおほくつけ夏草しげる汽車みちの堤とて

駒込の停車場に來ればあはれにも萩のにはほへる七月の末

汽車とまり汽車の出で行く停車場のダリヤの花の晝のくたびれ

草堤くさどての茅かやが根もとに野いばらの白く泣き居る夏の停車場

蒸気機関車ではなく、動力源に電動モーターを使用する電車の時代が到来する。同様に啄木作品にも路面電車などが登場してくる。

指尖さきの傷の痛みにひゞけつ、市街まちの電車のきしるわびしさ

如月きさらぎや電車に遠き山の手みそさざいのからたち垣みそさざいに三十三才鳴く

利玄の場合、近代的な鉄道が必ずしも明るいい心を表す要素とは限らなかった。汽車の汽笛が言いやうもなくたまらない悲しみを象徴している作品もある。啄木が長男を亡くした時の心境を思い起こさせる。

汽車の笛遠くひゞきて夜はふけぬ我が子の傍そばに通夜つやして居れば

近代産業の生産現場で労働を続ける人々がいる。工場の風景が浮かんでくる作品群である。

かしましき機械の音に耳張つめて目には見て居り工場こうちやう内部

工場こうば出ればすでに晝なり構内の眞土まつちにま日のかゞよへるかも

工場出で機械の音は遠退とほけり耳なごやかに風のさやるも

煙突の口ゆもり上る黒けむり日輪の前をよこぎれるかも

日の光土にいぶせくにごりたり煤煙空^{ばいえん}にひろごりにつゝ

工場裏機械^{こうちやう}のおもき音ひゞく大地のはだには日がしみてゐる

木下利玄作品の最後に、弱きもの貧しき人々への視点を見ておきたい。この点こそが石川啄木へ通じるものである。

窓ぎはのとある工女の二の腕の今日も今日とてふとれるすべなさ

工女たち工場の前^のの空き地にて日の目をみつゝ遊ぶあはれさ

野は夕日百姓たちは黒土に鋤を打ち入れ打ち入れやまず

木下利玄は自分の実生活とは縁遠い世界であったろう、経済的に恵まれない者たちへの愛情も持ち得ていた。このような視点は、石川啄木研究にあっても今後とも留意してよい点であろう。

5. 佐佐木信綱作品に登場する日本の光景

次に日本の古代から明治期に出現した国土の景色ならびに日常生活を垣間見ることのできる佐佐木信綱の作品を掲げる。まず近代を迎える以前からの歴史的な建築物への視線がみられる作品を掲げる。信綱の作品で最も知られているものは、次のような短歌であろう。

大門のいしずゑ苔にうづもれて七堂伽藍ただ秋の風

秋さむき唐招提寺鷄尾の上に夕日うすれて山鳩の鳴く

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

世は人はうつりいゆけど常春に震める塔よ何を夢見る

その仏寺には鐘が吊り下げられている。

山の上に初春きたる八百^{やほ}あまり八十^{やそ}のみ寺は雪に鐘打つ

いつまでか此のたそがれの鐘はひびく物皆うつりくだかるる世に

さまざまな道具が作品中に姿を見せることもある。

つち
地の底三千尺の底にありて片時やめぬつるはしの音

鶴嘴（つるはし）とは、地面の土や鉱山の鉱物を掘り起こすための先端が鋭利な鋼製の道具である。形状が鳥類の鶴の嘴（くちばし）に類似していることから、このように呼ばれる。多くの鶴嘴には、木製の長い柄（え）が取り付けられている。この柄の部分握って扱い、土などを掘る。

てうな きくず にはとり
春の日は手斧に光りちらばれる木屑の中に鶏あそぶ

手斧は普通「ちょうな」と呼ばれる刃物で、木工用の道具の一種である。やはり通常は木製の長い柄がつけられている。

やきがま とがま
農人はつつましやかにたてりをり焼鎌の敏鎌うしろ手にさし

次は衣服である。

うまやうまや きぬ
駅々ふるき衣着てあきがぜの中山道は老いにけるかな

ゆかた
湯の宿のつんつるてんのかし浴衣谷の夜風が身にしみるなり

果実や食材がうたわれている信綱の作品には、以下のようなものがある。

ぶどう
幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ

むぎふ ひばり はた
はるの雨麦生の雲雀こゑひくき畑のなか行く一乗寺村

び は
庭の枇杷赤らみにけり末の子がかく文ややにととのひ来けり

ちなみに、上の歌の「末の子」とは佐佐木幸綱氏（歌人・俵万智氏の師）の父親・治綱の幼き日の姿である。さらに、ふるさとのお食べ物かうたいこまれている作例もある。啄木にとっても「ふるさと」は好物をもたらしてくれる土地柄であった。

よ かいち しぐれ ひなが ながもち いえず と
四日市の時雨蛤、日永の長餅の家土産まつと父を待ちにき

近世以前からのあかりと近代の照明の両方が登場する。

らんぶ つ
秋の夜をふと目さむれば明らかに洋燈の点いて居るが嬉しき

わが^{とねりたいまつ}舎人松明の火を明うせよゆめの少女^{ゆくへ}の行方もとめよ

交通機関の中から舟運に目を向ける。利玄同様、舟にまつわる短歌は非常に多い。

櫓^ろをおせば光るうしほの光のみ暮れ残りつつ海はくれにけり

月のぼれり千里^{どうてい}洞庭の一隅^{よぎ}を過らむとする船^との進み迅し

皓^{かうかう}々たる月の湖上を船は進むこよひ神無^{かんづきとを}月十まり五日

月清し孤帆^{こはん}万里の風うけてゆくてにさやる何ものもなく

真白帆^{ましらほ}によき風みてて月の夜を夜すがら越ゆる洞庭^{うみ}の湖

みづうみを越えてにほへる虹の輪の中を船ゆく君が船ゆく

船ゆるらに夜^よの大海の風きよし月に横ぎるせとの白波

大き海に月おし照れり船^{ふなとも}を滝つ瀬なして流れ散る浪

一すじの煙をあとにのこしおきて沖をはるかに船はゆくなり

信綱作品から、陸上の交通を見渡したい。

くれなるの舟^にの頬^ほのおもわ波羅門^{はらもに}のかげにかくれぬ石だたみ道

まっしぐら^{こま}駒走らして縦横^{じゆうわう}に銀^{むち}の鞭ふる秋風の人

ますぐなる電車の道のまむかひにぽっかりと赤き月のほりたり

公共交通機関をダイヤ通り正確に運行するため江戸時代には普及していなかった計測器が時計である。

狂ひたる時計がなほも動きやまでたがへる時刻^{とき}をさせるさびしさ

次に文化面に関わる作品に目を注ぎたい。その一例として西洋式の近代的な印刷技術をあげる。下に見られる寒さとインクなどからは、啄木が経験した屋内にあってインクさえ凍るという釧路での酷寒の生活が思い出される。

夜に入れば秋らしき^{ひえ}冷校正のインク薄きにわが目しぶるも

佐佐木信綱にとっての花は多彩であるが、弟子の木下利玄との縁浅からぬ下のような花もあった。

現実の暴露のいたみまさやかにここに見るものか^{まんじゅしゃげ}曼珠沙華のはな

そして信綱も啄木や利玄と同じように、貧しき人々への視線を失わなかった。

^{つか}蛇遣ふ若き女は小屋いでて河原におつる赤き日を見る

6. むすび

平成23年（2011）3月11日金曜日の14時46分に「東北関東大震災」が発生した。その地震の規模はマグニチュード9.0であった。この歴史的な大地震によって北海道や青森県など北日本から、関東地方ならびに静岡県などの東海道一帯に及ぶ広範な地域の海岸線に大津波の被害を受けた。特に岩手県、宮城県、福島県の太平洋岸は、過酷な被害を受けた。その結果、福島県双葉郡双葉町の東京電力福島第一原子力発電所は、最も深刻な原発事故であるレベル7に達してしまう。現在にいたっても放射線被害が解決できない状況が継続しているのみならず、未来への確かな展望もない。これら全ての災害が「東日本大震災」と称されている。つまり石川啄木の「ふるさと東北」は、いま震災で傷つき疲弊している。

そのような今日であるが歌人・石川啄木がもつ特徴として、弱者や困窮状態に対する眼差しをあげることができる。とりわけ啄木自身の晩年は、極端な貧困と苦境にとりつかれた悲惨な毎日であった。「極貧生活」と「死の病である肺結核」と「母と妻の家庭内不和」さらに「満たされなかった夢」などが募った。そのような不幸に見舞われた彼は自分自身の経済的な貧しさだけでなく、他者の金銭的困窮に関しても作品を数多く残している。厳しい状況下における「生活の記録」「心の発露」を、短歌という文学形式で残した人物が石川啄木であった。

いま東日本大震災によって苦しい立場におかれた日本人であるからこそ、近代的な日常生活を見詰めなおすことには意義があるものと考ええる。本稿では啄木との比較研究を進める対象として歌人・木下利玄や、その師である佐佐木信綱について論考を進めてきた。

本稿では木下利玄と、その師である佐佐木信綱の作品で扱われている生活の場面に注目した。彼ら両名は石川啄木とは異なって西日本の出身者であり、生活面でも金銭的に啄木とは事情が異なっていた。しかしながら出自も経歴も啄木とは相当に隔たりを有しながら、利玄らは近代日本の庶民生活を韻文作品によって、結果的に記録するという文学活動を成しえた。本研究によって3人の相違点とともに、共通性をも示すことができたと考ええる。

今後とも筆者は、啄木と共通性あるいは相違点を見出すことができる文学者たちに関心を示していきたい。このように石川啄木と同時代文学者の作品へも研究範囲を広げることで、新し

い知見を得ることが出来るのではないのかと考えている。

本稿をまとめるに際して、三重県鈴鹿市在住の遠藤稔・詩奈子様ご夫妻はじめ佐佐木信綱記念館ならびに旧東海道「石薬師」宿、「庄野」宿の皆様にも多大な御力添えを頂戴した。末尾になってしまったが、この紙面を拝借して感謝の意を表するものである。また本研究は北翔大学北方圏学術情報センター（ぼると）より、「地域研究」グループとして認められたテーマの関連調査に基づく。末尾ながら当紙面を拝借して謝意を表する次第である。

注)

- 1) 拙稿「北原白秋の作品に見る近代産業と日常生活 ―石川啄木との比較を中心に―」、『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第11号』北翔大学生涯学習システム学部研究紀要編集委員会、北翔大学生涯学習システム学部、平成23年3月25日、PP.161-176。なお同拙稿は、「国文学年次別論文集『近代V』（平成23年）」編集：学術文献刊行会、発行所：朋文社、平成27年7月、PP.304-312にも採録されている。

本稿において各作品を引用した出典となる文献は下記のものである。

- 1) 若山牧水・島木赤彦・中村憲吉・木下利玄：『現代日本文学全集 69 若山牧水・島木赤彦・中村憲吉・木下利玄集』P.323-342および年譜としてP.430-432、筑摩書房、昭和33年6月5日
- 2) 島木赤彦・古泉千樫・中村憲吉・木下利玄・會津八一：『日本現代文学全集 52 島木赤彦・古泉千樫・中村憲吉・木下利玄・會津八一集』P.259-314および年譜としてP.399-403、講談社、昭和40年11月19日
- 3) 五島茂 編：『岩波文庫 4340-4341 木下利玄全歌集』岩波書店、1951年8月25日
- 4) 佐佐木信綱の作品に関しては、伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉編：『日本の詩歌 29 短歌集』P.14-27、中央公論社、昭和45年2月15日を主要な出典とした。
- 5) 佐佐木信綱の年譜としては、鈴鹿市教育委員会：『佐佐木信綱とふるさと鈴鹿』P.16-69、鈴鹿市教育委員会、平成2年3月31日を参照した。